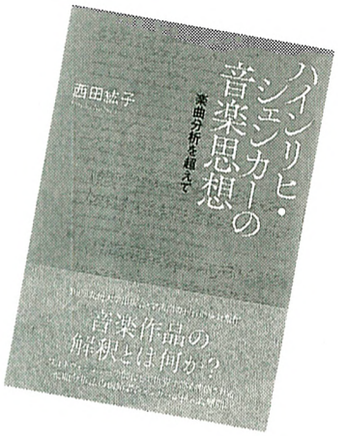
文学

シェンカー分析がなぜに脱構築的営為の対象になるのか

シェンカーは楽曲との対話を通して、彼自身の概念と表現を発見していった

藤田 茂

西田紘子 著
▶ハインリヒ・シェンカーの音楽思想
楽曲分析を超えて
6・20刊　A5判232頁　本体4600円
九州大学出版会



本書の企図を評者は次のように理解する。北米を中心とする英語圏で実践される楽曲分析法としての「シェンカー分析」からイメージされる教科書的なシェンカー像を、シェンカーそのひとの著作を読み込むことで再構築すること。いま「再構築」という言葉を使ったのは、本書のベースとなった西田の博士論文が『ハインリヒ・シェンカー像の再構築』であったからなのだが、本書の参考文献のなかに再考（rethinking）や再読（rereading）のスローガンがこだましていることを考えれば、これらを発する英語圏の思潮を尊重して、「再構築」よりもむしろ「脱構築」といったほうが通りがよいかもしれない。

シェンカー分析（あるいは、著者の言葉を借りるなら「シェンカー風分析」）がなぜに脱構築的営為の対象になるのか、そのこと自体、我々には必ずしも自明ではない。「シェンカー分析」がそれほどの勢力をもっているのだろうか、との疑問は当然だ。しかし、少なくともひと昔前までは、音楽分析をめぐる国際的な学会の場では、シェンカー分析の忠実な実践者に出会うことがままあったのだ。つまり、ある任意の楽曲を分析するに際して、まさしくその出発点に神聖不可侵な「ウアザッツ（根源構造）」を置き、このウアザッツの垂直的・水平的展開すなわち楽曲化の諸相として、その楽曲の特徴を物語る、そのような分析者がいたことは確かである。もっとひどい場合には、同じ方法で分析不可能であることを示すことによって、その楽曲の独創性を物語るという荒技がなされる現場を目撃することもあった。

この種のシェンカー分析の奇妙さは、自らが発見したわけでもない「ウアザッツ（根原構造）」を第1原理として受け入れてしまう素朴さにあるわけだが、この西田の著書は、つまるところ、このウアザッツが解釈手続きによって徐々に「発見」（むしろ「構築」）されていったものであることを示すものである。西田が戦略的に着目するのは、ウアザッツそのものよりその水平的顕現である「ウアリーニエ（根源線）」であるとしても、「シェンカーの教義」が神から預言されたものではなく、シェンカーという分析家の構築物であることを意識させるという意味で、西田の議論は脱構築的な効果を発揮しうるものである。

なるほど、本書には、シェンカーの教義の創出過程がひとつのラインとして埋めこまれている。このラインに従えば、本書全体を次のように読むことも可能だ。つまり、シェンカーにおける音楽分析は解釈行為に他ならないことが明示されたあと（第1章）、その解釈が言語連想的に物語られるものからウアリーニエにもとづいて物語られるものへと変化すること、かつ、その解釈が実践的なものから規定主義的なものへと変質していくことが論じられ（第2章）、最後にこのウアリーニエ自身の変遷がクローズアップされる（第3章）。

しかし、このような「読み」を採用するとき、西田が本書で実践する他の音楽思想家との比較という戦略は、いくらか装飾的なものに映ってくる。シェンカーの音楽分析が実証的なものではなく解釈行為である、ディルタイ流にいうならば自然科学に隣接したものではなく精神科学の圏内にある、それを論証するのにクレッチュマーとの対比は必要だろうか（第1章）。また、そもそも旋律とは別の次元にある線である「ウアリーニエ」概念の変遷を追うのに、ハルムの旋律論を引き合いに出してくる必要があるだろうか（第3章）。評者は、これら2つの章、それ自体の価値のことをいっているのではない（独立した論文としては面白いのだから）。あくまで、本書を貫く議論全体のラインについての評者の「読み」との関係で、それが装飾的ではないかといっているのだ。本書は当然ながら評者の「読み」とはまた別の「読み」にも開かれているだろう。

さて、本書において評者がもっとも共感する言葉は次のものである。「シェンカーにとっては、後景・中景をとおした前景の連関を獲得するために『新しい概念と表現を創造』する発見的な行為、すなわち線的連関の創造的な証明こそが分析の使命だったのである」。分析とはまさしく発見的な行為でなくて何だろう。シェンカーは楽曲との対話を通して、彼自身の概念と表現を発見していったのだ。その日々の発見をひとつの理論へと組み上げていく過程、すなわち理論創出の過程こそ現代の分析家にとって真に価値あるものだ。

逆に本書において評者がもっとも距離を置く言葉は次のものである。「[シェンカーの]解釈が規定主義的になるのは、普遍的な理論体系を構築するためである。理論がそもそも普遍化をはらむかぎり、そのこと自体を批判することは筋違いであろう」。しかし、分析家が創出し終わった理論を、それが可能なレパートリーに適用することに腐心しはじめるなら、それは確実な堕落であり、規定主義はその兆候である。それを批判することなくして、現代の分析家がシェンカーを糧にすることはできまい。

本書によれば、ラッベンは「ウアザッツへの盲目的な還元論に対する反動として、シェンカー自身のうちに柔軟な方法論があったことを見出そうと」した、また、クラークも「[1935年の]『自由作法』における一枚岩的なウアリーニエに対し、[1920年代前半の]『音の意志』における変動的ウアリーニエのほうに『進歩性』を」見たという。では、西田にとってのもっとも創造的なシェンカーはどこにいるのか。それに答えることは本書の目的ではない、というのも理解できる。しかし、その主張なくしては、脱構築を超えてシェンカー像を真に再構築するには至らないのではないか。

本書はそれゆえ未完成である。評者は大いなる希望をもってそういいたい。現代の音楽分析家こそ本書を読み、自らの答えを見つけ、これを完成すべく日々の仕事を遂行することを期待されているのだから。

（音楽学）

芸術